

春日井市遺跡解説パンフレット その4

春日井の中世

－ 戦乱の世 の まじない と 祈り －





中世のまじないと祈り

時代背景 中世とは、時代区分として概ね鎌倉～室町時代に該当し、公家から武家への政権移行は政争・戦乱を招き、自然災害・飢饉・疫病等も相まって社会不安をかき立て、平安時代末期の末法思想が現実のものとなったとして人々は畏怖した。

情勢不安を背景として、病気治癒等の現世利益の祈願や念仏による極楽浄土への往生を説く鎌倉新仏教の興起、修験者らの活動によって、庶民への仏教思想やまじないが急速に広まり、中世は「まじない」の時代でもあった。

中世の遺跡 春日井市内には住居や関連遺構から成る集落跡をはじめ、生産遺跡では古墳時代以来窯業生産が継続し、戦乱の世を反映した城館跡、宗教・信仰等に関係した墓・祭祀遺跡・社寺跡があり、多様な遺跡や出土遺物からは当時の生活の一端や土木技術・手工業生産、思想的背景等、様々な情報を読み解くことができ、現代の伝統文化・習俗の基層を成すものも少なくない。

集落跡 市域の集落跡は、南気噴・大留・神領・堀ノ内・松河戸・勝川の各地区の区画整理に伴い確認されたものが大部分を占め、みかけ上、庄内川流域に偏在した分布状況を示している。中世以前の時代と重複する複合集落跡で、庄内川の自然堤防上(微高地)に立地し、氾濫原(低地)に水田を拓く土地利用形態は、近世を経て現代へと継続する。出土遺物は庶民の暮らしを示す生活雑器が多く、煮炊き具や調理具として鍋・釜や掘り鉢・卸し皿等があり、現代へ通じる食文化の歴史的起源が垣間見られる。

城館跡 城館跡には戦乱に備えた防御施設である城・砦のほか、土豪の館を含み、地域支配・戦略拠点として、交通要衝や眺望のきく高台に立地する例が多い。上条城跡・大留城跡は土塁・堀が現存する希少例で(大留城跡は土塁のみ)、田楽砦は事前調査に伴い地表下に堀の一部が確認されたが、『春日井市史』編さん当時遺存した下大留・白山等の居館をはじめ市域の城館跡は大部分が未調査のまま滅失したため、具体的な様相は不明点が多い。

歴史上の記録として、小牧・長久手の戦いにおける「三河中入り」に際して、市域は両軍の進軍経路に当り、羽柴(後の豊臣)方では上条城跡・大留城跡が関係し、織田・徳川方では田楽砦のほか、庄内川を渡河する際、徳川家康と郷土長谷川甚助との地名「勝川」に因む逸話が残る(「かち」=戦勝の吉兆として旗竿の竹を切り、陣羽織を与えたという)。

窯業遺跡 市域の窯業生産は古墳時代後期・6世紀前葉の下原古窯跡群(須恵器)に始まり、奈良時代(須恵器・灰釉陶器)へと断続的に継続し、鎌倉時代の内津第1・2号窯(山茶碗)の後、空白期間を経て幕末～明治時代にかけて明知窯、西尾第1・2号窯等で磁器生産が行われた。古墳時代から室町時代の窯跡(窖窯)は、築窯(傾斜地形)・材料(粘土・水)・燃料(薪)・供給経路の関係上、平地ではなく、河川に臨む丘陵地帯に分布することが特徴である。

墓・祭祀遺跡 中世の墓として、松河戸遺跡の木棺墓のほか、勝川・大留・白山等、市内各所で蔵骨器の出土事例があるが、当時、火葬は僧・武士等の有力者に限られ、庶民の墓の実態は不明な点が多い。墓制や葬送、死穢(シ)を祓う禊の儀礼は当時の死生観や仏教の教義・思想が反映したものと考えられる。

祭祀遺跡は、墓を除く祈りや祭の場として、非日常を示唆する特異な遺構や遺物の出土状態が認められ、集石遺構を検出した下市場中世遺跡や数百枚に及ぶ小皿が集中的に出土した白山中世遺跡がある。また、祭祀に特化した遺構や遺跡のほかに、古墳(横穴式石室)を祭祀の場として転用した事例や集落においても溝や井戸等から、破碎・埋納・大量遺棄等の特異な状態を示す祭祀関連の遺物が出土することがある。

1:溝底面に重ね置かれた山茶碗(桜佐下五反田遺跡) /2:大量の山茶碗・皿が出土した溝(桜佐下五反田遺跡) /3:掘立柱建物と区画溝(桜佐下五反田遺跡) /4・5:内津第1号窯窯体と出土遺物 /6:石組井戸(桜佐下五反田遺跡) /7:方形縦板組井戸(桜佐下五反田遺跡) /8:水溜転用曲げ物(桜佐下五反田遺跡) /9:堀ノ内第1号墳出土土書土器

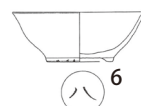
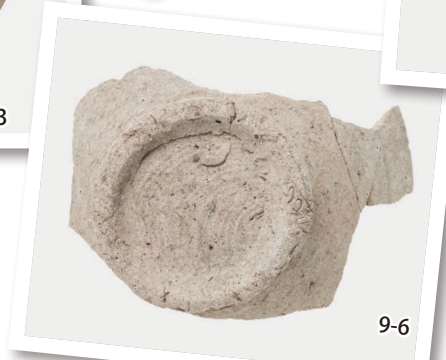


-
- Map of the archaeological site of Kofun No. 1, showing various burial mounds, ponds, and surrounding geographical features. The map includes labels for specific sites like '明知第1号墓' (Machi No. 1 Tomb), '神屋第1号墓' (Kamaya No. 1 Tomb), and '白山中世遺跡' (Shirayama Medieval Site). It also shows the '桃山古窯跡群' (Momoyama Ancient Kiln Site Group) and '下原古窯跡群' (Shimohara Ancient Kiln Site Group). The map is color-coded by terrain: Momoyama (green), Tanasaka (dark green), Utsunohara (light green), and others. A scale bar indicates 0 to 3km.

桜下五反田遺跡は内津川と庄内川の合流点に位置する縄文・古墳・古代・中世と断続的に展開する集落跡で、中世の遺構として、掘立柱建物・区画溝・井戸・廃棄土坑等を検出した。溝からは大量の山茶碗・皿が出土し、中には「十」等の墨書や複数段に重ねたものがあり、まじない的な意図が考えられる。井戸は板材と石組による2種類の構築法があり、底面に掘り物を用いた水溜を備える。掘形からは比較的大形の実碗片が出土し、井戸の構築過程での地鎮あるいは豊富な湧水への願い、また、埋戻しに際しては大量の川原石を集中投棄しており、井戸を封じる意図が考えられる。

堀ノ内第1号墳は7世紀中葉の横穴式石室を伴う円墳である。石室内部からは副葬品の金環・須恵器(無蓋高坏・台付長頸壺・提瓶)のほか、後世に持ち込まれた山茶碗・伊勢型鍋が出土した。碗には底面等に文字・記号を墨書したものがあり、呪術的記号の可能性から、石室を祭祀空間として転用した事例と考えられる。

石室から中世の陶器等が出土した例は、高蔵寺第3号墳・親王塚古墳にも認められる。





1

中世のまじないと祈り ～ 白山中世遺跡にみる小皿の大量遺棄と禁忌思想 ～

遺跡の概要

白山神社境内(白山町9-2)に所在し、南北に延びる丘陵の東向き斜面 標高70～80m付近に立地する。昭和45年1月、法面造成工事に伴い発見され、緊急調査が実施された。遺跡の正確な範囲や遺構は不明だが、出土遺物には鎌倉～室町時代(13世紀から15世紀)にかけての陶磁器(山茶碗・古瀬戸・青磁・白磁等)・瓦・銅銭・鉄製品(鏃・馬具)がある。山茶碗(碗・小皿)は膨大な量が出土したが、中でも小皿は完器または7～8割残存の破損の少ないものが200枚以上密集して出土し、特異な在り方を示している。居住(一般集落)に不向きな立地や当時、瓦葺きの建物は社寺等に限られることから白山神社[伝 養老2(718)年創建]、南に位置する円福寺[養老7(723)年草創]、谷を挟んだ東側の尾根上に点在する中世墓(白山古墓)との関係が想定でき、遺跡の性格としては、宗教または民間信仰に関係の深い祭祀遺跡と考えられる。

小皿を用いた祭祀の様相 数的には碗よりも小皿が圧倒的に多く、主たる祭祀具であったこと。祭祀は一過性のものではなく、型式の特徴から13世紀後半から15世紀後半の約200年間[山茶碗編年第7～11型式]に亘って継続したこと。碗・皿とも胎土が精良で器壁が薄い北部系(東濃窯系)が主体的で、胎土に砂粒を含み器壁の厚い南部系(瀬戸窯系)は客体的であること。密集して出土した小皿は完器のほか、一部を打ち欠いたもの、あるいは細かく打ち割ったものがあり、祭祀に伴い遺棄または破砕する忌避思想が読み取れることを一連の特徴とする。

小皿の出土状況は、かわらけ(=土器)を用いた祭祀と共通した在り方を示し、形代として厄・穢れを移し、祓うものと考えられる。白山中世遺跡では、かわらけは数点の確認に留まるが、祭祀具が陶製の小皿に置き換わった理由の一つとして、付近に所在する内津第1号窯等の北部系山茶碗窯が大量供給を担った可能性が想定される。かわらけ投げ・かわらけ割りは、現在も厄除けまたは願掛けのまじないとして、全国の社寺で行われている。



2



3



4

1:調査地点遠景(白山中世遺跡) / 2:小皿の出土状況(白山中世遺跡) / 3・4:連珠文軒平瓦(白山中世遺跡) / 5:出土した小皿 集合(白山中世遺跡) / 6:白山中世遺跡出土遺物 / 7:墓の盛土と礫(白山古墓) / 8:蔵骨器出土状況(白山古墓) / 9:蔵骨器(白山古墓) / 10:蔵骨器(勝川遺跡) / 11・12:蔵骨器出土状況・集合(大留町字鞘巻地内)



5

中世墓と火葬 ～ 白山古墓 ～

遺跡の概要 白山古墓は、白山中世遺跡と谷を隔てた東側の丘陵尾根の南端、標高約80mに立地する。隣接して3基以上の墓が確認され、円福寺の僧または、同寺が関係した墓域と考えられる。

蔵骨器と墓の構造 蔵骨器は、火葬した焼骨を納める容器で、古瀬戸四耳壺を転用して底に小円孔をあけ、口縁部を打ち欠いて整形し、蓋として山茶碗を伏せて重ねる。墓は、直径約30cm・深さ10～20cmの穴を掘り、蔵骨器を埋めて固定した後、盛土により直径2～3m・高さ50cm程の半球形の丘を形成し、表面を10～15cm大の円礫で覆う構造である。

同様な中世墓(蔵骨器)は、勝川・大留に類例があるが、地形上は丘陵ではなく、段丘上の平地に立地する点異なる。大留では近接して郷士日比野太夫居館(下大留城跡)が位置し、また、付近に寺が所在したとの伝承もあり、武士または僧が被葬者として想定される。



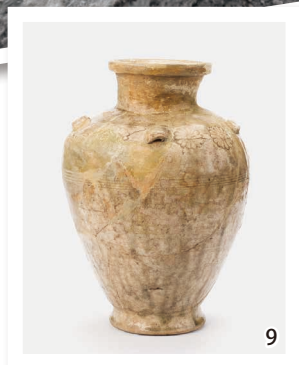
6



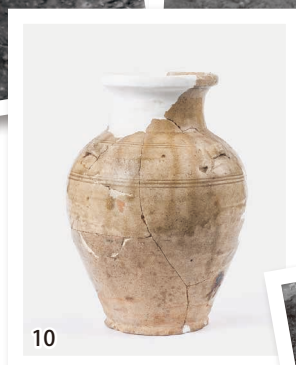
7



8



9



10



11



12



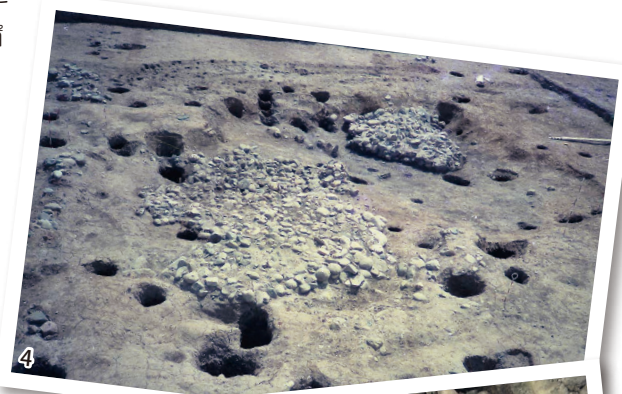
中世の祭祀遺構と「市」 ～ 下市場中世遺跡にみる配石遺構と石鍋 ～

遺跡の概要 下市場中世遺跡は、内津川右岸に臨む自然堤防上標高約31mに立地し、区画整理に伴い昭和61年3月・62年7～8月の2度に分けて約600㎡が発掘調査された。調査前は水田で、鎌倉時代の遺物包含層を挟み、遺構は現況下約40cmの地山に構築されている。検出した遺構は鎌倉時代(13世紀代)を中心とし、掘立柱建物のほか、石を敷き詰めた大型の配石遺構が注目される。出土遺物は陶器のほか、広域流通を示す輸入磁器や九州産と推定される石鍋、刀子等の鉄製品、大小の砥石、銅銭等がある。

配石遺構と「火屋」 配石遺構は直径約5mの略円形で、40～50cmほど掘りくぼめた底面に川原石を敷き詰め、配石の周囲には柱穴を伴い、上屋(屋根)が存在したと考えられる。この配石遺構と部分的に重複する形で別の配石遺構を検出し、近接した位置で新旧の作り替えが行われているほか、東側にもやや離れて石材の集中部があり、複数の配石遺構が存在する。旧の集石遺構も50cmほど掘りくぼめているが、一面炭・灰で覆われ、地山の一部には炎による赤色変化が認められる。遺構の構築当初に配石はなく、一定期間の「火」を焚く行為の後、川原石を敷き詰めたと考えられ、強い炎を伴う遺構としては火葬遺構「火屋(ほや)」の可能性が考えられる。配石遺構の周辺からは銅銭のほかまとまった量の陶磁器が出土しており、特に小皿は完器を並べたような状態や重なった状態で出土し、祭祀後の遺棄は厄・穢れを祓う意図が考えられる。配石遺構の北東側に位置する複数の掘立柱建物是一般住居ではなく、葬送・祭祀に関連する施設と考えられ、下市場中世遺跡は居住域から外れた非日常的な祭祀空間であったと想定される。

石鍋・「いち」墨書と遺跡の性格 石鍋は滑石を加工したもので、日本では10世紀の終わりから16世紀のはじめにかけて、長崎県・福岡県等、限られた地域で生産・供給され、希少性の高い高級品で、尾張地域での出土事例はごく限られる。広域流通を示す石鍋・輸入磁器のほか、底面に「いち」と墨書きした小皿が出土し、「いち」＝「市」の意であるならば、所在地名「下市場」とも相まって遺跡の性格を類推する上で重要な示唆となる。交通路

として陸路や河川(内津川・庄内川)を利用した水上交通路を想定可能な点も人・モノが交わる地域＝物流拠点との推測を補強する要素である。なお、実際に「市」が開かれていたかは文献上の記録もなく、調査は居住域から外れた地点に相当するため、今後の検討課題である。



1:小皿出土状況(下市場中世遺跡) / 2:石鍋出土状況(下市場中世遺跡) / 3:配石遺構と掘立柱建物(下市場中世遺跡) / 4:新旧の配石遺構(下市場中世遺跡) / 5:旧配石遺構土層断面(下市場中世遺跡) / 6:火屋を示唆する地山の被熱と炭化物(下市場中世遺跡) / 7～9:下市場中世遺跡出土遺物・石鍋・「いち」墨書 / 10:配石遺構(下市場中世遺跡) / 11・12:藤山台出土蔵骨器 / 13:東山出土蔵骨器 / 14:大久手古墳実測図『高蔵寺町誌』加筆転載



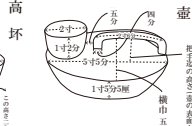
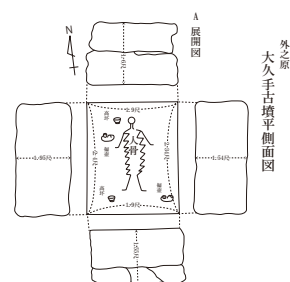
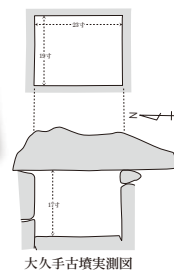
仏教教義と火葬

火葬とは遺体を焼却し、残った骨を葬る葬送の一つで、バラモン教・ヒンドゥー教には「火によって遺体を速やかに損壊することで、靈魂による肉体への束縛を断ち切り、煙とともに靈魂を天上界に送って成仏を促す」という考えがあり、釈迦の生まれたインドでは火葬が一般的に行われ、仏教にも取り入れられた。日本史上では700年に「道昭和尚物化す…天下の火葬これよりして始めり」(『続日本紀』)と記し、天皇では702年に亡くなり、殯(もがり)の後703年に火葬された持統天皇が最初とされる。火葬は8世紀以降、天皇にならって上級役人等から地方へ、時代が降るにつれて仏教の教義と共に公家、武士へと広まる。

火葬とは遺体を焼却し、残った骨を葬る葬送の一つで、バラモン教・ヒンドゥー教には「火によって遺体を速やかに損壊することで、靈魂による肉体への束縛を断ち切り、煙とともに靈魂を天上界に送って成仏を促す」という考えがあり、釈迦の生まれたインドでは火葬が一般的に行われ、仏教にも取り入れられた。日本史上では700年に「道昭和尚物化す…天下の火葬これよりして始めり」(『続日本紀』)と記し、天皇では702年に亡くなり、殯(もがり)の後703年に火葬された持統天皇が最初とされる。火葬は8世紀以降、天皇にならって上級役人等から地方へ、時代が降るにつれて仏教の教義と共に公家、武士へと広まる。

火葬と蔵骨器 春日井市内では、藤山台において8世紀初め頃と推定される須恵器 壺を転用した蔵骨器が出土し、8世紀代を通じて、東山・出川に出土事例がある。いずれも丘陵地に立地する点が特徴的で、火葬の開始から間もなく、当地域にも伝わったことを示す。

大久手古墳 丘陵尾根上標高約150mに立地し、高蔵寺ニュータウン造成工事に伴う発掘調査(再調査)の後、玉川小学校へ移設された。古墳として登録しているが、8世紀以降の築造時期・墓制(火葬墓)からは墳墓として区別すべきもので、石槨墓は尾張地域では希少例である。方形の石槨は各辺1～2石、底面と天井石は扁平な1石で構成し、内側の規模は東西約58cm・南北約72cm・高さが約50cmである。内部から須恵器平瓶2点・有台杯2点、人骨の細片や炭化物が出土し、平瓶を蔵骨器・有台杯を蓋とすると2人の埋葬とも考えられる。





小牧・長久手の戦いと田楽砦

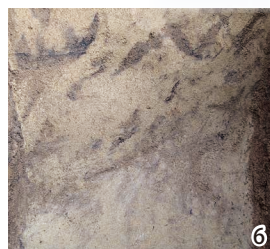
砦普請 天正12(1584)年3月、羽柴秀吉は楽田を本陣に、小牧山を北東から包囲する布陣とし、小牧山に本陣をおく織田信雄・徳川家康は小牧山から東へ、蟹清水・北外山・宇田津・田楽に連砦を築いて対峙した。田楽砦は、郷士長江平左衛門が自らの屋敷を提供し、篠木・柏井の村人約2,000人を動員しての突貫工事で急造したものとされ、池田恒興の奇襲により落城した犬山城主中川勘右衛門の敗残兵を家康が自ら慰撫し、守護させたという。

砦その後 長江平左衛門の後裔の屋敷として、一辺約40～45mの方形の地割を留め、昭和30年代まで東側に土塁と堀の一部が残存していたが、未調査のまま滅失した。その後も周囲の宅地化が進行し、砦の実態は不明であったが、平成29年1月に住宅工事に伴う事前調査により、堀の一部を確認した。

砦の調査成果 堀は、長江屋敷の西側境界に沿う南北方向(堀1)と堀1の南東約20mの位置で北西-南東方向(堀2)の2筋を確認し、屋敷を全周した場合、東西45m・南北60mほどの規模が想定される。堀1によると、断面逆台形の箱堀で、上辺4.56m・底辺1.75m・深さ1.76m、表面には堀を掘削した際の鋤先の刺突痕が無数に残る。

堀の埋土の内、底面に自然堆積した土砂は数cmから10cm程度で、大部分を黄色系の粘土が占める。粘土は堀を掘削した際の土塊と考えられ、片側から流入するような在り方からも堀に隣接する盛土(=土塁)の存在を示唆し、戦の終結後、砦の解体に際して突き崩して埋戻しを図ったと考えられる。また、堀2から出土した天目茶碗等は、16世紀頃のもののが大半を占め、発掘調査成果は、砦が戦に連動する形で急造・解体されたという歴史事象とも整合性が高い。

1:田楽砦の箱堀(堀1) / 2・3:堀2全景と土層断面 / 4・5:堀2出土遺物 / 6・7:堀表面の掘削痕と埋土中の土塊(堀2)



春日井市遺跡解説パンフレットその4

春日井の中世 ― 戦乱の世のまじないと祈り ―

編集：春日井市教育委員会 発行：平成30(2018)年3月31日 印刷：木野瀬印刷株式会社



このパンフレットは、文化庁「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」により作成しています。